



子どもをもつこと (不妊)

性腺機能に影響を及ぼすがん治療により、不妊となる可能性がある小児・AYA世代のがん患者さんや、将来お子さんの希望がある患者さんに妊孕性温存療法が適応となる場合があります。

性腺機能に影響を及ぼす可能性のある治療

<男性>

精巣や骨盤内の手術、精巣への毒性が強い抗がん剤治療（アルキル化薬）、精巣・脳（下垂体、視床下部）への放射線照射

<女性>

卵巣や骨盤内の手術、卵巣への毒性が強い抗がん剤治療（アルキル化薬、白金製剤）、卵巣・脳（下垂体、視床下部）への放射線照射

<共通>

インターフェロン(IFN)-αチロシンキナーゼ阻害薬

妊孕性温存療法

妊孕性温存療法とは、**卵子、精子、受精卵、卵巣組織の凍結保存を行う**ことです。

がん治療により性腺機能への影響を受けた場合でも、将来お子さんを希望する場合の選択肢を残すことができます。

がん患者さんの**妊孕性温存療法は治療前に行う**ことが推奨されており、**生殖医療専門施設での相談**が必要となります。

相談窓口

まずは、がん治療により不妊となるリスクがあるかどうか**がん治療医にご相談ください**。リスクがある場合は、治療前に生殖医療医へ相談が可能ですので、**担当医、担当看護師**または**患者サポートセンター（病院棟8階）**にお尋ねください。